第７期鹿追町総合計画策定会議専門部会議事録

<table>
<tr><td>専門部会名</td><td>教育専門部会（第１回）</td><td>議事録作成者</td><td>企画課企画係
係長　迫田　明巳</td></tr>
<tr><td>開催日時</td><td colspan="3">令和５年８月 22 日　10：00　～　11：30</td></tr>
<tr><td>開催場所</td><td colspan="3">町民ホール２階セミナーＡ</td></tr>
<tr><td rowspan="9">委　　員
事務局等
出　　欠</td><td>出</td><td>部会長　　神谷　秀俊</td><td>出</td><td>学校教育課長　宇井　直樹</td></tr>
<tr><td>出</td><td>副部会長　俵谷　俊彦</td><td>出</td><td>社会教育課長　平山　宏照</td></tr>
<tr><td>出</td><td>委　員　　上野　精嗣</td><td>出</td><td>学校教育課主幹　天野　健治</td></tr>
<tr><td>出</td><td>〃　　上嶋　浩二</td><td>出</td><td>企画課　　迫田　明巳</td></tr>
<tr><td>出</td><td>〃　　大下　洋美</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>出</td><td>〃　　中谷　桃恵</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>出</td><td>〃　　足利　正治</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>出</td><td>〃　　佐々木睦美</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>出席者</td><td colspan="3">なし</td></tr>
<tr><td>1.部会長挨拶</td><td colspan="3">□神谷部会長より</td></tr>
<tr><td>2.説　　明</td><td colspan="3">□宇井課長から専門部会の業務について説明
・10 月６日までに３回の審議を予定
本日：教育大綱と総合計画の関連性などについて
９月上旬：社会教育分野について
９月中旬：学校教育分野について
場合によって追加でもう１回程度開催
・令和５年４月に教育大綱を定めている。総合計画の見直しに当たっては教育大綱との整合性も必要なので、事前に説明する。</td></tr>
<tr><td>3.教育大綱説明</td><td colspan="3">□天野主幹
・配布資料に沿って教育大綱、日本の教育の現状・課題、Well-being（ウェルビーイング）、文部科学省の調査「令和２年度青少年の体験活動に関する調査研究結果報告」に基づく体験活動の重要性について説明
【別添資料】</td></tr>
<tr><td>4. 意 見 交 換
（ブレスト）</td><td colspan="3">□宇井課長
次回から基本計画の見直し作業を進めていくが、今日の話を聞いてのブレストを行って、次回以降の作業につなげていきたい。今日は特に何かを決めるとかという訳ではないので、皆さんの思ったことを是非意見交換していきただきたい。</td></tr>
<tr><td>発言者</td><td colspan="3">主な発言内容</td></tr>
<tr><td>俵谷副部会長

足利委員</td><td colspan="3">グループＡ
（俵谷副部会長、中谷委員、足利委員、佐々木委員、宇井課長、迫田係長）
● 海外における Well-being（ウェルビーイング）とは、どんなものだろうか？
● 言い方が正しいかわからないが、簡単に言うと「宗教」のようなものと思う。いわゆる「絶対神」がある。「個」がある。日本は「個」が絶</td></tr>
</table>

	対的なものではなく、変化する。家庭や学校、例えばサッカークラブの一員としての「個」というように、カメレオンのように変化していく。親や仲間は自分と同じレベル・階層であって、決して上下の関係ではない。
俵谷副部会長	● Well-being の状況をどう表現できるのだろうか？「高い」「低い」といいうものではないし、「乏しい」でもないだろうし。
足利委員	● 自己肯定感なので、高いとか低いとか言うものでは無いと思う。
中谷委員	● 自分の子どものことで考えると、自己肯定感は低いと感じる。自分のできたことをメモする、そしてできたことを自分でほめる「自分褒め」の習慣の実践を行ったことがある。できたことを増やす、それを互いに確認していくという作業。図書館で出会った本に書かれていたことを実践した。そういった日々の積み重ね作業で自己肯定感を高めていくことが大切だと思った。
佐々木委員	● いま中谷委員が言われたことを小学校がどれだけできているか。どれだけできても「～けど」がついてしまう。先生方も「出来た」ということを大切にしていきたい。
足利委員	● 諸外国だと 16 歳で人生の方向性を決めることが多い。7 割は大学に行かない。そして 16～22 歳でその分野を徹底的に叩き込まれる。そういった人材が日本に流れ込んでくることを経済会は危惧している。「日認知能力」を高めることが大切と言われている。非認知能力とは、獲得する能力。その逆は「認知能力」。認知能力は、教えてもらったら出来る能力のこと。
俵谷副部会長	● そういった能力による内容をどうして学校ではリスト化できないのだろうか？
中谷委員	● 家庭では親が子どもに、学校では先生が生徒に教えるという関係性がある。友達同士や、自分で高めるという機会が少ない。他者理解をしていくことが大切と思う。
迫田係長	● 先ほどの天野主の話で「学校の先生があえて教えない」という話があった。中学校の部活の指導をしているが、子どもがどういった段階になればそういうことができるか、また、教える立場からすると、目標を達成させてあげたい、成長させてあげたいという思いも出てくる。子どもが自分で考えなければならないというのは、頭では理解していても実行するのが難しい。
宇井課長	● 日本は、子どもたちにとって「出来る」のレベル・ハードルが高い。出来ていても、自分では出来ないという。スポーツの世界では、日本は子どもたちのレベルが非常に高い。でも、日本でプロになるのが目的なので、その先の成長がなかったりする。海外では、その先のことを考えている。
足利委員	● 日本は大人の関りが密である。突き放す、子どもに任せていくことが大切。オランダでは、４歳までは習い事は禁止されている。早い段階から家庭の外で子どもに学ばせることが推奨されていない。
俵谷副部会長	● 外国では「自己裁量年齢」という言葉がある。日本にはそれがない。自己裁量がないから、失敗したら誰かのせい。みんな同じ場所にいすぎる。どうしても比較してしまう環境がある。個別最適性という考え

	方が大切。違うことをやっていれば劣等感を感じない。迫田さんはマラソンがすごく速いが、私はそれに勝とうとも思っていないので劣等感を感じることはない。 ● 鹿追高校では探求の授業に力を入れてやっている。自分の言葉で話せる生徒が多い。
足利委員	● リーダーを養成していくことが大切だと思う。もちろん、リーダーになれる子もいれば、そうでない子もいるが。
宇井課長	● だからこそ社会教育活動の大切さを感じる。学校の中で作っていけないものをどうやって社会で育てていくか。リーダーをつくるというのもその１つ。
足利委員	● リーダーに関しては「つくる」という考え方がまずダメ。「待つ」ということが大切。
俵谷副部会長	● Teaching（ティーチング）と Coaching（コーチング）の違いといったところ、Coaching（コーチング）の重要性ということだと思う。
迫田係長	● 時には劣等感も大切という認識は、そのとおりでよいだろうか。
俵谷副部会長	● 自分で求めていった場所・分野での劣等感は成長にもちろん必要だと思う。
足利委員	● 劣等感は感じるものではなく、乗り越えるものという捉え方が良いと思う。
俵谷副部会長	● それを、鹿追町で、教育でといったときにどのようなことができるか。
佐々木委員	● どこから任せられるのかということを常に考えている。小さいうちからの方が有効だと思っている。
	グループＢ （神谷部会長、上野委員、上嶋委員、大下委員、平山課長、天野主幹） 【意見概要】 ● 明治以来の多くの生徒を１つの教室に入れて行う画一的な教育は限界にきている。 ● ＬＧＢＴなど多様性に目を向けた教育が必要ではないか。
5. 連絡事項	□宇井課長より 本日の意見交換を踏まえて、次回で話したいことなどを各自整理してもらいたい。 次回日程　９月７日（木）19 時 00 分～20 時 30 分